



Title	平成15年度 意匠学会賞および意匠学会論文賞
Author(s)	増山, 和夫
Citation	デザイン理論. 2003, 43, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成15年度 意匠学会賞および意匠学会論文賞選考結果の報告

意匠学会各賞に関する規定に基づき、6月30日を締め切り日として学会各賞候補の推薦を募集したところ、期限までに届いた推薦書は各賞それぞれ少数であった。そこで、選考委員会では規定に沿って委員の推薦により数候補を選考リストに加えることとした。最終的には、「意匠学会賞」の候補者3名、「意匠学会論文賞」の候補者6名があげられた。選考委員会は慎重審議の結果、本年度の各賞には下記の受賞者がふさわしいと判断した。その結果を意匠学会委員会に報告し、承認を得て決定した。

委員長 増山和夫

「意匠学会賞」

受賞者 宮島久雄 国立国際美術館館長

業績 『関西モダンデザイン前史』の著作

経歴

1936年 大阪市生まれ

1960年 京都大学文学部卒業

1963年 京都大学大学院文学研究科修士課程修了

1963年 京都市立日吉ヶ丘高等学校教諭

1966年 大阪芸術大学（専任講師，助教授）

1976年 国立国際美術館主任研究官

1985年 京都工芸繊維大学工芸学部（助教授，教授）

1996年 京都大学大学院教授

1998年 国立国際美術館館長，現在に至る

著書

2003年 『関西モダンデザイン前史』中央公論美術出版

主要共著

1978年 『ブラック／レジェ』小学館

共同編集

1991年－1999年 『バウハウス叢書』14巻，別巻Ⅰ，Ⅱ

1996年 『現代のデザイン』勁草書房

『バウハウス叢書』担当訳書

1991年 ピート・モンドリアン『新しい造形』

1991年 ヴァルター・グロピウス『バウハウス工房の新製品』

- 1992年 モホリ＝ナギ『材料から建築へ』
1993年 テオ・ファン・ドゥースブルフ『新しい造形芸術の基礎概念』
1995年 ヴァシリー・カンディンスキー『点と線から面へ』

展覧会図録監修等

- 1971年 『バウハウス50年』展 東京国立近代美術館
1978年 『イスのかたち』展 国立国際美術館
1980年 『絵画のアール・ヌーボー』国立国際美術館
1983年 『裸体画100年の歩み』国立国際美術館
1985年 『絵画の嵐——1950年代』国立国際美術館
1987年 『モンドリアン』展 西武美術館
1994年 『英国のモダン・デザイン』展 京都国立近代美術館

受賞

- 1986年 『サミュエル・ビングと日本』（『国立国際美術館紀要』第1号掲載）で昭和61年度ジャポネズリー研究学会賞

授賞理由

日本の近代デザイン史、デザイン思想史、デザイン教育史研究にとって京阪神を核とした関西の重要性は極めて高い。関西は日本の伝統的な工芸や図案を育んだ地であるだけでなく、日本で最初の官立高等工芸学校が1902年に京都に開設されるなど、近代デザインへと向かう時代に、日本のデザインの歴史全体にとって重要な活動がそこで繰り広げられたからである。『関西モダンデザイン前史』はおもに京都高等工芸学校の関連資料等に基づき、もう一つの重要な教育機関である京都市立美術工芸学校や大阪を中心とした産業界との関連にも眼を向け、明治、大正時代から昭和初期にかけての関西におけるデザイン教育とデザイン活動を記録、分析するとともに、両者の関係を浮かび上がらせようとした労作である。随所にちりばめられた、著者が長年培ってきたヨーロッパの近代デザインについての学識に裏打ちされた分析と考察は他書には得がたく、関西を対象としたデザイン史研究の第一の里程標になると同時に、関西あるいは日本のデザイン史研究を超えた、より普遍的な価値を有している。以上の理由から『関西モダンデザイン前史』の著作が学会賞にふさわしい業績であると判断された。

「意匠学会論文賞」

受賞者 菅 靖子 埼玉大学教養学部助教授

論文 「室内装飾の表象——近現代イギリスの消費文化に関する一考察——」

『デザイン理論』No. 42掲載学術論文

経 歴

- 1968年 福岡県に生まれる
- 1992年 東京大学教養学部卒業
- 1994年 東京大学総合文化研究科修士課程修了
- 1998年 ロイヤル・カレッジ・オブ・アート人文学科デザイン史専攻博士課程修了
- 1999年 東京大学総合文化研究科博士課程単位取得満期退学
埼玉大学教養学部専任講師
- 2000年 埼玉大学教養学部助教授, 現在に至る

主要論文

- 1997年 “‘Campaign for Improving Appearance’: A Case Study of the GPO Aesthetics”, One-Off: a collection of essays by postgraduate students on the Victoria & Albert Museum/Royal College of Art course in the history of design, Lithosphere, London
- 1999年 「アーツ・アンド・クラフツ運動とモダニズムのはざままで — チャールズ・ロバート・アシビューの機械文明観 —」『デザイン理論』No. 38, 意匠学会
- 2000年 “State Patronage of Design?: The elitism/commercialism Battle in the GPO graphic production”, Journal of Design History, vol. 13. no. 1, Oxford University Press
- 2000年 「表象に見る通信技術: 1930年代イギリス通信省の「威信」広報政策」『技術と文明』第21冊, 日本産業技術史学会
- 2000年 「両大戦間期のアーツ・アンド・クラフツ展覧協会とスウェーデン」『デザイン理論』No. 39, 意匠学会
- 2001年 「ヴィクトリア朝における趣味の政治学 — 装飾美術館の“戦慄の間”」『一橋論叢』第125巻第3号, 一橋学会
- 2003年 “‘Purgatory of taste’ or Projector of Industrial Britain? The British Institute of Industrial Art”, Journal of Design History, vol. 15. no. 4, Oxford University Press
- 2003年 「「美術製造」の周縁 — 19世紀半ばのマンチェスターにおける芸術振興とデザイン学校 —」『デザイン史学』第1号, デザイン史学研究会
- 2003年 「室内装飾の表象 — 近現代イギリスの消費文化に関する一考察 —」『デザイン理論』No. 42, 意匠学会

主要訳書

2002年 マルコム・バーナード著『アート、デザイン、ヴィジュアル・カルチャー——
社会を読み解く方法論』アグネ承風社（共訳、永田喬）

授賞理由

本論文は、イギリスにおいて、個々のデザインをスタイルの統一を意識してコーディネートした室内装飾がパッケージされて、家庭雑誌や三次元的な手引きなど、見せ方を工夫しながら、中流階級へ浸透してゆくプロセスについて解明した貴重な研究である。

産業革命を遂行したイギリスは近代デザイン発祥の地であり、これまでも多くの論考が存在するが、制作者の立場から美的な問題を中心に行われてきた。ヴィクトリア時代から現代までを視野にいれ社会と生活の全体を見渡し、室内装飾がファッションとして消費されるまでを論じた視点は、最新の研究動向を踏まえながら、我国の今日に繋がる論者独特の切り口である。

イギリスで展開したデザインは、国政と家政に繋がり、各国それぞれのありようで受容され今日の隆盛をみる。本研究には、これからのデザインを考察してゆくうえで必須な生活者、とりわけ女性の視点を取り込まれており、このようなデザイン研究を通して近代の読み直しも可能であることを示唆している。

本論文に先立つ一連の論文は豊富な資料の精緻な読みを通してイギリスのデザインを再考しており、その蓄積がこの成果へ展開したと考えられる。